

反日赤軍への転生を！

—日本赤軍77・5・30路線転換に対する我々の見解—

第一章 民族主義的—国主義的傾向

第一節 “日本”とは何か？

日本赤軍という組織名を構成している“日本”とは何であろうか？ いかなる実体を示す概念なのであろうか？ その構成員が日本人ということなのであろうか？ 日本国籍を有する赤軍ということなのであろうか？ 日本革命を担う赤軍ということなのであろうか？ 革命組織の組織名は、その組織の路線の本質を端的に象徴するものであり、またそうでなければならぬ。自らの組織名として“日本”を冠する革命組織は、その路線の本質において、民族主義的であり、一国主義的である。日本赤軍はアラブ赤軍からの組織名の変更をいかなる総括に基づいて行なったの

であらうか？

“日本”とは何か？

“日本”という固有名詞の原義は、民族名でもなく、地名でもなく、国家号のカテゴリーに属する。“日本”とい

う国家号が正式に使われ出したのは、8世紀初頭であり、この“日本”という国家号の成立と古代専制君主の称号としての“天皇”の成立は不可分一体の関係にあり、ともに、古代専制律令国家の天皇制帝国としての成立と軌を一にしている。

“日本”の“日”とは何か？ “日”とは“陽”であり、太陽のことであり、天照皇大神の子孫であることを意味する。“日本”とは「陽のもと」の国」「陽出づる処の天子の国」「天皇の国家」を意味している。“日本”と“中華”

とは、その思想的意味内容を同じくしている。「中華」とは漢民族が、傲慢不遜にもオノレを開化した文明世界の中心と自惚れ、四囲の原始共同体に生きる原住民諸部族を、「辺境」「野蛮」「東夷・西戎・南蛮・北狄」と称して蔑視し絶滅せんとした古代文明帝国主義の反革命思想そのものである。「中華」帝国を模倣し、オノレを文明世界の中心と自惚れつつ、中央にまつるわぬ原住民諸部族「エビス」「ハヤト」「クマン」「ツチゲモ」「ミシハセ」……を「辺境」「野蛮」「夷狄」と称して蔑視し、絶滅し、さらに先輩、「中華」帝国をも「陽没する処の国」と蔑視するウルトラ傲慢帝国主義思想こそ、「日本」という国家号の思想内容である。

地球上の一切の植民地支配・搾取階級制を掃滅しようという共産主義思想と「日本〇〇」と自称する思想とは絶対に相入れない矛盾対立する思想である。共産主義をめざしつつ、「日本」を名のことは絶対的矛盾である。「日本」を名のことは、古代―近代―現代の帝国主義思想の継承を内外に宣言することである。これでもなお日本赤軍は、矛盾を感じずに、この「日本」という国家号を自らの組織名に冠し続けるのだろうか？

第二節 戦略的スローガンの誤り

「私たちは天皇制日本帝国主義を打倒し、アメリカ帝国

自立論にしる、共通して、日本という国家・民族が、一九四五年日帝の敗北、米帝の一時的占領という事態にもかかわらず、古代建国以来、現代に至るまで一貫して帝国主義であったという点を捨象し免罪している点で、被植民地人民の側からすれば、反革命的である。

△米帝追放V（ないしは△米帝一掃V）という戦略的スローガンを掲げている党派には、日本赤軍以外に怒濤派、紅旗派、ML派などがあるが、帝国主義抑圧民族たる日帝本国人による、この△米帝追放Vという戦略的スローガンの提出は、本質的に民族主義である。この△米帝追放Vという戦略的スローガンは、いわゆる従属論もしくはその変型的亜種を理論的に前提するものであり、したがって民族独立の方向性、すなわち、日帝本国人の民族的反革命的団結の強化の方向性を内包し、侵略反革命のイデオロギーの武器たる、日帝本国人の民族性を肯定・美化・固定化するものであるが故に、被植民地人民の側からすれば反革命的である。帝国主義抑圧民族である日帝本国人の革命闘争は、一貫して、その民族性、その民族的反革命的団結を破壊する方向で発動されねばならぬ。

世界帝国主義の第一次・第二次植民地侵略戦争奪戦の前夜を問わず、日本国家は一貫して内延的外延的植民地支配（註1）を土台とした帝国であった。天皇制反革命勢力が権力を奪取し、資本主義的近代化路線を歩み出した日本帝

主義を追い出し、社会主義を建設するために闘います（A）「私たちは、日本帝国主義を打倒し、アメリカ帝国主義を追い出し、社会主義を実現することを、日本人民共和国の建設として闘いぬきます」（B178P）「日本革命を勝利完成する闘い……」（C17P）とあるように、日本赤軍は、日本一國主義革命の枠内で、その戦略的スローガンを△日帝打倒V△米帝追放V△日本人民共和国建国Vとして定式化している。

反日共系新左翼の△日帝打倒V路線は本質的に一國主義である。ブント系の△日帝打倒V路線は、日本共産党とのいわゆる「従属―自立」論争の歴史的産物であるが、この「従属―自立」論争は、いずれの側にとつても、先ず「帝国主義（独占資本主義）なら社会主義革命」という先進国プロレタリア革命論を共通の前提としており、その上で、日本一國において独占資本が復活・自立しているか否かという問題の立て方をしている。そして、日本一國において未だ独占資本は復活しておらず、米帝に植民地的に従属していると主張する日本共産党にしる、既に復活自立していると主張するブントにしる、世界帝国主義の国際的連鎖から日本資本主義を切り離し、米帝との力関係という現象論的次元で、レーニン『帝国主義論』（これ自体根本的致命的誤りをいくつも含んでいるが）の機械的アテハメを行なっているにすぎない。また、この論争は、従属論にしる、

国は、自らを世界帝国主義の国際的連鎖の有機的一環として組み込みつつ、先ずは、地政学的便宜性を利用して、アイヌモシリ・ウチナーの武力併合に手をつけ、さらに台湾・朝鮮への侵略・植民地化を開始した。対清・朝鮮侵略戦争によって台湾を強奪し、朝鮮に対する植民地支配の土台を構築した日本帝国は、世界帝国主義のパワー・ポリティクスを利用した対露・朝鮮侵略戦争によって、南カラフトを強奪するとともに朝鮮に対する独占的植民地支配を確固不動のものとしつつ、世界帝国主義の第一次植民地侵略戦争へと至る過程で独占資本を確立させ、以後レーニン云うところの「帝国主義」（独占資本主義）として、独占資本の意志を代行する天皇制軍部官僚のヘゲモニーの下で、その植民地侵略の領域をシベリア・中国大陸・東南アジア・南太平洋諸島へと拡大していった。

一九四五年の日本帝国の軍事的敗北、USA帝国反革命軍による一時的占領も、日本帝国を本質的には何ら解体するものではなく、USA帝国のヘゲモニーによる世界帝国主義内部の政治・経済・軍事的力関係の再編でしかなかった。日本帝国は、財閥解体等々の経済的制裁や外延的植民地の全面喪失によって、一時的には、独占資本の力を滅殺されたが、依然としてアイヌモシリ、ウチナー、在日朝鮮人・台湾人・中国人社会への内延的な植民地支配は維持しつづけた。

USA帝反革命軍の朝鮮侵略戦争への加担によって再建の具体的契機をつかんだ日本帝国は、一九五〇年代後半から賠償をテコとした旧被侵略国への商品輸出、それを呼び水とした資本輸出の再開をもって独占資本の力を回復させ、60年代には世界帝国主義を形成する中級帝国へ、70年代にはUSA帝国、西独帝国と並ぶ世界帝国主義の主力帝国へとの上がり、世界帝国主義の中層部（「中進国」「発展途上国」）・周辺部（「後進国」・「低開発国」）に新植民地主義収奪網を重層的に（国際的債務奴隸制、企業の多国籍化、垂直分業、多国間貿易等々）形成している。

したがって、日本帝国が世界帝国主義の国際的連鎖の有機的一環として組み込まれて以降、日本帝国を打倒・解体・消滅させる世界革命の戦略的ポイントは、一貫して日本帝国の内延的外延的植民地支配・侵略を撃つことであった。アイヌモシリ、ウチナー、在日朝鮮人・中国人社会に対する日本帝国の内延的植民地支配こそ、日本帝国の、道義的により根源的なアキレス腱であり、一九四五年以前においては、東アジア・東南アジア・南太平洋諸島に対する侵略・植民地支配こそ、日本帝国の政治経済的な生命線であったし、一九五〇年代以降は、アジア・太平洋・南アメリカ・アラブ・アフリカへの新植民地主義侵略こそ、日本帝国の政治経済的な生命線である。それゆえ、この日本帝国の道義的アキレス腱と政治経済的命脈の両定点に革命的破

壊力のテコを入れ、日本帝国の権力中枢を撃っていくことこそ、世界帝国主義の全面的根底的打倒の一環として日本帝国を撃滅していく世界革命の戦略的ポイントである。

日本帝国主義（独占資本主義）打倒という戦略的スローガンは、日本帝国の、アイヌモシリ、ウチナー・在日朝鮮人・中国人社会に対する内延的にインペイされた植民地支配の打倒を捨象しており、かつレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という待機主義的受動的戦略を前提としているため、新植民地主義侵略下の地域の革命戦争に日帝本国内から呼応し、地域革命戦争の細流を世界革命の大河へと合流させていくことができず、一國主義的枠を越えることができない。

それゆえ、世界革命の観点から唯一正しい、打倒対象を基軸とした戦略的スローガンは、「日本帝国主義打倒」ではなく、「世界帝国主義の全面的根底的打倒、その一環としての日本帝国撃滅」すなわち「世界帝国主義打倒・日帝撃滅」である。ここで言う「日帝撃滅」とは、日本帝国の国家権力の打倒↓日本帝国の解体↓日本帝国の地上からの完全掃滅を一体として行うことを意味している。この戦略的スローガンの下で日本帝国の道義的アキレス腱と政治経済的命脈の両戦略点に、軍事Ⅱ政治的鉄鎚を振り下しつつ日本帝国の権力中枢へ攻撃を加える時、世界革命の展望が切り拓かれるのである。

日本赤軍云うところの△日本人民共和国△とは何なの

であろうか？ 「人民が主人公となる社会」（C35P）とか「人民が仕合せに暮せる社会」（B83P）とか言いかえたところでその内実は何一つ明らかにならないばかりか、逆に益々曖昧模糊としたものになるばかりである。△日本人民共和国△は、現日帝の歴史的現在の植民地主義収奪の結晶たる国内外の資産（生産手段・物的文化的富）に対してどのような処置をとるのか？ 被植民地人民に返還するのか？ それとも日帝本国人ブルジョアジーから奪取し、日本人民の共有財産に転化するだけで、そっくりそのまま継承するのか？ △日本人民共和国△は、アイヌモシリ・ウチナーに対する現日帝の占領政策・植民地支配・同化強制をそっくりそのまま継承するのか？ △日本人民共和国△は、アイヌの共産主義的反日独立闘争、ウチナンチューの共産主義的反日独立闘争、ウチナンチューの共産主義的反日独立闘争が出現した時、それに対してどのように対処するのか？

総じて、△日本人民共和国△は、日帝本国内に、主要には日帝本国人ブルジョアジーの手に収奪独占されている生産手段と物的文化的富の、被植民地人民による逆収奪という世界革命の根源的テーゼに対して、どのように回答するのか？

△日本人民共和国建国△という路線の問題設定の仕方は、本質的に民族主義であり、一國主義であり、被植民地人民

の側からすれば反革命的である。

我々は、打倒対象を基軸とした戦略的テーマを「世界帝国主義の全面的根底的打倒、その一環としての日本帝国撃滅」として措定し、建設対象を基軸とした戦略的テーマを「過渡期人類共同体の建設、その実体としての反日共同体形成」として措定する。世界帝国主義の全面的根底的打倒の過程で建設されるのは過渡期人類共同体であり、日本帝国撃滅の過程で、日帝本国人がオノレらの歴史的現在の反革命性を自己否定しつつ形成するのは反日共同体である。日本帝国撃滅の総過程とは、過渡期人類共同体の諸実体である、アイヌ共同体・ウチナー共同体・チヨソソ共同体・反日共同体……の形成過程である。反日共同体とは、日帝本国人の歴史的現在の反革命性の自己否定を民族性の止揚にまで貫徹しつつ、階級廃絶の契機のみならず、民族歴絶の契機をも内包し、過渡期人類共同体の実体として全世界共産主義人類共同体の建設をめざす総戦士共同体である。そしてこの過渡期人類共同体の権力実体として、我々は世界革命評議会を措定する。

我々は基軸的な戦略的スローガンを次のように定式化する。

△世界帝国主義打倒・日帝撃滅△△過渡期人類共同体建設・反日共同体形成△

（註1）内延的植民地支配とは、日帝本国内に組み

込まれ著しく同化を強制され、現象的には植民地支配とは見えない植民地支配の形態（別名国内植民地）を指し、それ以外の一般的なものを外延的植民地支配として区別した。また内延的植民地支配の場合でも原始共産制にあつた時に和人封建勢力によつて植民地化が開始されたアイヌモシリ、封建制にあつた時に和人封建勢力によつて植民地化が開始されたウチナリ、強制連行によつて形成された在日朝鮮人・中国人社会は、それぞれ区別して把握されなければならない。

第三節 我々が学ぶべき伝統とは？

「日本には日本独自の革命の伝統と人民がいます。……日本の父母、兄弟、おじいさん、おばあさんたちに学んで、私たちは団結をかため……」（D）と日本赤軍は言う。しかし、日本には、狙うべき反革命と植民地侵略の巨大な伝統があつても、学ぶべき革命の伝統はほとんどない。残念ながら日本人には誇るべき革命の伝統はない。近代一〇年一貫して日帝の侵略反革命を支え、その先兵となつてきた日本人民には世界に誇るべきいかなる革命の伝統もない。日帝本国の国境内に革命の伝統を見出そうとするならば、それは日本人民ではなく、日本民族の侵略反革命と対決してきた東北原住民の、アイヌの、ウチナンチュの、在日朝鮮人・中国人の反日（武装）革命史である。

しまうものであるが故に、被植民地人民の側からすれば反革命である。日本赤軍の問題の立て方では、例えば一九一八年の「米騒動」にみられるように、日帝本人の反権力的階級闘争が、朝鮮人民に対する植民地主義収奪を強化する結果をもたらし、朝鮮人民から米を奪ひ朝鮮人民を餓死に追いやることで収束されていったという反革命的事実を批判することはできないし、むしろ、この反革命的事実を積極的に擁護してしまう。

第四節 日本民族主義への投降

以上の分析から我々は、日本赤軍の理論的上部構造が、日本民族主義に投降し、社会排外主義に転落しつつあると判断する。被植民地人民を踏台にしてその生活が成り立ってきた、そして現在も成り立っている日帝本人たる我々が、まずもつて学ばなければならないのは、アイヌ・ウチナンチュ・朝鮮人・中国人……の反日武装革命史であり、それを通して、日帝本人としてのオノレの反革命的な感性・思想・立場を自己解体することである。そして、日帝本人としての歴史的現在の反革命性（収奪者性・侵略者性・支配者性・寄生虫性）を、具体的戦闘を通して実践的に自己否定し、それを民族性の止揚へまで貫徹すること、そのことで初めて、オノレを世界革命の根源的な主体として形成し得るのであり、この反日思想を媒介しない日帝本

我々、日帝本人革命者は、先づ何よりも、七八九年一〇万の兵力を投入した大和朝廷反革命軍を撃破敗退せしめ千数百人を殲滅した、アテルイ卒いる東北原住民の反日武装蜂起、一四五六六年コシャマインらの反日武装蜂起、一六六九年シャクシャインらの反日武装蜂起、一七八九年のクナシリ・メナシの反日武装蜂起こそ、自らの革命伝統、すなわち、反日武装革命の精神的思想的よりどころとしなければならぬ。東アジア諸国人民を侵略・植民地支配してきた、そして今なおそれを肯定している我らが祖先、我らが祖父母、我らが両親は批判・糾弾の対象ではあつても、反面教師ではあつても、決して革命の教師ではあり得ない。確かに、近代一〇年日帝本人プロレタリアート・農民・小ブルは、反権力的階級闘争を戦つてきた「伝統」をもつてはいる。しかし、この反権力的階級闘争総体としては、決して、一國主義的民族主義的枠を越えることはなかったし、日帝の植民地侵略戦争を阻止し得なかつたばかりか、逆に日帝本人としての反革命的既得権益を擁護し拡大してきたのである。日本赤軍が学べといつては「革命の伝統」なるものは、この日帝本人の反権力的階級闘争の伝統と解釈できよう。

日本赤軍が「革命の伝統」を云々する場合の問題の立て方は、日本人の歴史的現在の反革命性をインペイし、一國主義的民族主義的階級闘争を肯定・美化・固定化してし得ない。

日本赤軍の、日本民族主義への投降は△天皇制思想▽の分析においても如実に現われている。いわく「天皇制思想は、封建思想とニセの民族意識の結合環としてあります」（B170P）と。日本赤軍は、ここで△天皇制思想▽と結びついているのは、△ニセの民族意識▽であると言ふことによつて、△天皇制思想▽とは結びついていない△眞の民族意識▽なるものがあるということを想定し、それを肯定している。だが△天皇制思想▽と日本人の△民族意識▽すなわち日本民族主義とは切り離すことはできない。△民族意識▽に△ニセモノ△も△ホンモノ△もない。△天皇制思想▽とは古代日本帝国主義の、世界帝国主義独占資本段階にふさわしい復活版であり、△天皇制思想▽こそ、日本民族主義の中核的イデオロギーである。

日本赤軍は、△反天皇制▽を語ることによつて、日本民族主義と根源から対決するどころか、逆に、日本民族主義に投降し、客観的には、「反封建ブル民革命をやつてから社会主義革命」という二段階革命論（あるいはその変型的亜種）の方向に引き寄せられつつある。

第五節 スターリニストへの先祖返り

共産主義者同盟赤軍派結成総会報告（一九六九年八月）は、結果的には観念論的に空転し破産してはいるが、一国革命主義寄せ集め世界革命論・一国プロ独・一国社会主義を批判し、克服しようという方向性を打ち出している。

「今、革命的党派に問われているものは、（一）自国・一国の矛盾の解明や帝国主義世界のそれでもなく、明らかに過渡期世界を解明し、その総体を革命する世界観・世界戦略であり、（二）その実践的課題は、一国プロ独↓世界プロ独やプロレタリアートをまず国民的支配階級に高めそれから世界的階級へではなく、一国権力奪取↓世界革命戦争ではない」（E 47 P） 「彼等は現代の権力闘争・武装蜂起が文字通り、世界Ⅱ一国であり、長期の世界革命戦争であり、世界プロ独で終わることを理解出来ず、依然としてロシア革命をスターリニストと同様に普遍化し、現在に適用し、権力奪取↓プロ独↓世界革命戦争として『段階的』『一国↓世界』として考え、それ故に革命とプロ独は算術総和の寄せ集めであり、世界党も又、寄せ集め党としてしか把えないのだ」（E 51 P）

ところで、77・5・30路線転換後の日本赤軍はどうか？日本赤軍の出生母胎たる共産主義者同盟赤軍派の前記『報告』が批判し訣別したはずの「一国革命主義寄せ集め世界革命論」についてなす崩壊的路線転換であるということはいなめない。

例えば、日本赤軍が「『世界同時革命』を主張することは、人民を愛し信頼し結びつこうとしないことからきているのです。抑圧されている人々が一つの心で結びあうところが私たちの帝国主義に対する決定的な武器です」（B 110 P）と言う時、日本赤軍は、「世界同時革命論Vに対する論理的批判を行なうのではなく、革命戦略の問題をA愛VとかA信頼VとかA心で結びあうVとか、ムード的主観主義にすり替えているのである。日本赤軍は「革命主体の最大の思想闘争は主観主義との闘いである」（B 67 P）と提起しているながら、実は、日本赤軍自身深く主観主義におかされて

るのである。

第二章 世界認識の誤り

『三里塚の闘う農民へ』と題された声明文の中で、日本赤軍は次のように言っている。

「いま帝国主義のブタどもの土地破壊、強奪の開港強行に対して、非妥協に闘う中にしか、人間として共に生きる途はありません。パレスチナの人民も同じ闘いをやってき

命論・一国プロ独・一国社会主義に回帰しているのではないだろうか？ スターリニストへの先祖返りをやっているのではないだろうか？

「世界革命への自らの主体的な責任であり、日本人民への責任である日本革命、日本人民共和国建国という主体的な革命路線をもつということ……」（B 65 P） 「人民の革命事業は個別性・特殊性をおびながら、一挙的であったり、持久的であったりします。その根本的な人間観の一致を求めあい創造しあう過程の権力の奪取形態は、やはり一国的であり、建設過程は、一国的な社会主義の自力更生を基軸とする国際主義によって、世界社会主義の勝利完成へと向かうものです」（B 107 P） 「各国人民とその代表である党の自力更生を基本とする主体的な闘いの結合こそが、世界革命を準備していくのです」（B 109 P）

ここで日本赤軍が言うところの「世界革命」とは、一国革命の算術的総和・寄せ集め革命としてのスターリニスト風「世界革命」であることは歴然としている。連合赤軍敗北以降の赤軍諸派（プロ革派、ML派、紅旗派等）がそうであるように、日本赤軍もまたスターリニストへと先祖返りしていると言えよう。

では、日本赤軍は、赤軍派結成時のA過渡期世界論V A世界同時革命V A世界革命戦争V A世界党Ⅰ世界赤軍Ⅰ世界革命戦線Vという総路線の厳密な理論的総括の上に立りました。土地収用法で次つぎと人民は暴力的に土地を追われ、その土地はシオニストギャングの軍事基地・植民村になっっています。パレスチナの闘いとは土地と人間の生活を奪い返す非妥協の闘いです。それはパレスチナだけではなく、エリトリアでもオーマンでも、世界中どこでも同じ闘いをやっています」（F）

日本赤軍は、帝国主義者どもによる土地の強奪・占拠と、それに対する戦いは「世界中どこでも同じ」だと言う。だが、日本赤軍の言うように、単に土地強奪という現象形態の同一性をもって、それに対する闘争の質までも同一であるとするのは正しいであろうか？

三里塚農民からの土地の強奪は、日本帝国主義者どもによる、同一民族・同一国民たる日本人小生産者からの土地（生産手段）の強奪であり、三里塚の農民は例え土地を奪われても、国外に追放されたり、植民地支配を受けたり、あるいは種族絶滅の危機にさらされたりすることはない。

三里塚農民の戦いは、日帝本国内の反権力的階級闘争として位置しているが、それ以上ではない。

パレスチナ人の場合はどうか？ パレスチナ原住民からの土地の強奪は、同一民族・同一国民内部のそれではなく、世界帝国主義に支援されたイスラエル帝国主義者・シオニスト・ユダヤ人植民者という異民族による侵略・植民地化の一環としてのそれである。それは、まさに世界帝国主義

の侵略最前戦における、帝国主義侵略勢力と被植民地原住民勢力との激烈な対立闘争である。

さらに、アマゾン地帯等の原始共同体部族の場合はどうか？

エクアドル東部のアマゾン地帯の原住民アウカ族は、一六世紀初頭に始まる白人征服者・宣教師の侵略に対して、頑強に抵抗し、これを撃退してきた。一九四〇年に開始されたシェール石油の探査事業に対しても作業員への攻撃を繰り返してこれを断念させた。一九五六年一月空から侵入しようとして、地に下りたった白人宣教師5人を殲滅した。

一九七七年一月には、エクアドル石油と契約しアウカ族の大地に侵入し採掘調査をしているフランス系企業の作業員3人を殲滅した。かくしてアウカ族は、文明人による侵略・破壊・強奪から母なる大地を守り抜いている。

ブラジルの文明人どもは、いままなお大地を強奪するために、考えられる限りの残酷な文明的方法で原住民の大量虐殺(エスノサイド(種族皆殺し))を行なっている。マツト・グロソ州と Rondônia 州境界のアリプアニア川の上流に住んでいたシントス・ラルガ族は六〇年代を通じて、と素入りの砂糖やダイナマイト攻撃で大量虐殺された。一九七〇年二月八日、国立インディオ財団の長官とUSSチールの重役がヘリコプター一機で部落にやってきて、バラカナ族にインフルエンザ菌のついた毛布を与え、最初の

を通じて行なわれたアマゾン開発に、トヨタ自工を中核とした日帝企業群が積極的に参加している。アマゾン・アルミ精練計画を中心的に推進している三井アルミ工業社長川口勲は「我々はアマゾン開発の先兵のつもりだ。後に続く日本企業を考えると、どうでも、この計画はやりとげにやならんのです」と本音を吐いている。

一九六四年「トランス・アマゾニカ・ハイウエー」建設計画が決定された段階では二〇万人に減少していた原住民は、建設が進められていた一九七二年には一〇万人に、そして現在生き残っているのは二・三万ないし八〇部族一万とも言われ、現代のような虐殺が今後もなお続けられるならば一九八〇年代には全滅するであろうと言われている。このような文明人の侵略に対して、原住民は弓矢等の原始的武器で種族的死活を賭けた戦いを行なっている。例えば一九七〇年にラエレンテ族が工事現場を襲撃して工事監督を殺しており、このような戦いは頻発している。

フィリピン・北部ルソンの山岳部族カリンガ族は、USA帝・日帝に支援されたマルコス・ファシスト政権によるチコ河ダム建設という開発侵略(大地強奪)に抵抗して戦っている。さらに、日本人によるアイヌからの大地(モシリ)の強奪、それに対する戦いも、アマゾン地帯原住民のそれと同一の戦いである。アマゾン地帯等の原始共同体部族からの、文明人による大地の強奪とそれに対する戦いは、地

六日間で四〇人以上を虐殺した。ジャバエ族は、侵入してきた文明人の牧場の鉄条網に包囲され、文明人がもたらした結核、トラコーマ、インフルエンザ、ハジカに冒され、虐殺された。一九七〇年四月、ある白人商人が、原住民狩りをすべく、六人の殺し屋を雇い、九人のアトロアリ族を虐殺した。一九七三年五月一日、一団の白人殺し屋がマクチ村を襲い、原住民を虐殺した。一九七二年、ペトロラス(ブラジル国営石油会社)の白人労働者たちの侵略(強姦や虐殺)によって、マヨロナ族は、約二千人から四〇〇人に人口が減少し、絶滅の危機にさらされている。こうした文明人の侵略、大地の強奪に抵抗して戦う部族に対しては、さらに武装宣撫隊や宣教師団、私設の殺し屋部隊を送り込み、捕えた原住民は、拷問技術開発センターに送り込み、生きた教材としてなぶり殺しにしている。

アマゾン・ハイウエー網の建設こそ、原住民絶滅計画のキー・ポイントである。一九七四年に完成した「トランス・アマゾニカ・ハイウエー」は、原住民がいようがいまいがジャングルをダイナマイトで吹っ飛ばして整地し、ナバーム弾を使って、ジャングルを焼き払ったり、農薬や除草剤を空からまき散らして自然を破壊するというUSA帝反革命軍がベトナムで展開した方法を踏襲して、原住民を追い払い虐殺し、原住民から本源的な生活手段である大地を奪い、建設された。この原住民からの大地の強奪とエスノサイド

球上への文明の発生以来数千年に渡って戦われてきた原始共産圏と文明圏との激烈な対立闘争の一面面である。

日本赤軍のように、単に「土地強奪」という現象の同一性をもって「同じ戦いだ」と言ってしまうことは、以上指摘した、①帝国本国内諸階級の対立闘争、②帝国主義侵略勢力と被植民地原住民勢力との対立闘争、③原始共産圏と文明圏との対立闘争という本質的に区別されねばならぬ位相的差異を捨象してしまうばかりではなく、帝国本国人の、「土地死守」の戦いが、即自的には反革命的である場合があるという側面をインペイし肯定・美化してしまう。

例えば、「北海道」で伊達火力発電パイプライン埋設工事に反対している日本人農民は「入植して三代目、先祖に申しわけない。死を覚悟の上、土地を守る」と宣言して「戦って」いるが、彼ら日本人農民が死守せんとしている土地は、本来アイヌの大地であり、アイヌから強奪した土地なのだ。アイヌから強奪した土地を死守すると宣言している日本人農民は、アイヌにとってはまさに反革命である。(アイヌモシリを強奪・占拠した和人の子孫であり、現在も強奪・占拠し続けている日本人農民は、アイヌによるアイヌモシリ奪還の反日闘争に合流する方向のみ、オノレの侵略者植民者としての反革命性を自己解体し得るのである。)

「人間は皆同じだ」というブルジョア観念論に依拠する

日本赤軍の皮相で平板な世界認識では、人類世界史の三層構造を対象化することができないのはけだし当然であり、その結果、原始共同体部族の存在を抹殺し、日帝本国入たる日本人農民と被植民地原住民であるパレスチナ人・エリトリア人・オーマン人を一緒にしてしまうのも、当然といえは当然である。

「人間は皆同じ」という日本赤軍のこの考え方からすると、イスラエル人民とパレスチナ人民も並列同一視されてしまうが、日本赤軍はこの明白な誤りにすらも気づいていないのだろうか？

日本赤軍と共闘関係にあるといわれているPFLPは、この点限界はあがるがかなり明確な見解をもっている。「シオニストのイデオロギーや支配による搾取から自らを解放することはユダヤ人プロレタリアートにとっては良いことであるが、同時にこのユダヤ人プロレタリアート個人は、よりひどい搾取に苦しんでいるアラブ人を、シオニスト達が搾取し続けていることの恩恵を受けているという構造がある」(G231P)。また、アル・ファタも「イスラエルの労働者階級でさえ、アラブ系パレスチナ人の労働者農民からの搾取の受益者なのである。ユダヤ人入植者は、アラブ系パレスチナ人から掠奪された家に住み、その土地を耕し、その富を享受している。イスラエルや、今ではさらに、新しい占領地区のアラブ人労働者は、ユダヤ人労働者より

はるかに低い賃金をうけ、いやしめられた筋肉労働に従っている」(H261P)と指摘している。

ユダヤ人プロレタリアートがパレスチナ原住民大衆の身体に寄生する帝国主義的寄生虫であり、支配者であるのと同様に、三里塚農民を含めた日帝本国入総体は、パレスチナ原住民大衆を含めた被植民地人民の身体に寄生する帝国主義的寄生虫であり、支配者なのである。日本赤軍のごとく、三里塚農民もパレスチナの人民も同じだということは、世界帝国主義の重層的な搾取―被搾取V/A収奪―被収奪V/A支配―被支配V構造を捨象し、結果的には、日帝本国入の歴史的現代的反革命性(侵略者性・収奪者性・支配者性・寄生虫性)をインベイスし、免罪することになるのである。

日本赤軍は、日本人民もパレスチナ人民も同じだということによって、さらに、帝国主義抑圧民族の民族性と植民地被抑圧民族の民族性の質的区別すら論理的に対象化し得ていないことを示している。この点PFLPは限界はあるがかなり明確な見解を持っている。「ヨーロッパのブルジョアジーは、自分達の利益の維持のために、民族主義を表明し利用しているが、それは後進国に現われる民族主義とは同じものではない。後進国の民族主義は革命的な概念を獲得しており、それは資本主義の段階としての帝国主義に反対して、隷属している人民を動員するための体制となつて

いるのである。」(I140P)

帝国主義抑圧民族と植民地被抑圧民族の民族性は、画然と区別して考察されねばならぬ。帝国主義抑圧民族の民族性は侵略反革命の武器である。これに対して植民地被抑圧民族の民族性は、植民地支配からの自己解放の武器となり得る。帝国主義抑圧民族は、植民地被抑圧民族の民族性の革命的側面を学ぶことを通して、オノレの反革命的民族性を自己解体し、それを世界革命の過程で共産主義的人間性へと自己改造していかねばならない。他方、植民地被抑圧民族の民族性は、植民地支配からの自己解放の武器とはなるが、世界帝国主義の全面的根底的打倒としての世界革命の武器とはなり得ない。植民地被抑圧民族の民族性もまた、世界革命の過程で、ブルジョア民族主義的傾向、一国社会主義的傾向を徹底的に自己否定することを通して、革命的側面を発展させ、共産主義的人間性へと自己改造していかねばならぬ。

日本赤軍の皮相で平板な世界認識、そこから帰結する帝国内国人(その民族性)と被植民地人民(その民族性)との無媒介的同一視は、日本赤軍が日帝本国入としての歴史的現代的反革命性の自己否定を回避しているというその在り様と密接な関連がある。

第三章 市民主義的改良主義的傾向

一階級闘争を更に強固なものに成長せしめる基盤が広けれ

ば広い程、獲得することそのものが不断に、それにとどまらず、帝国主義支配の限界をつきやぶり、革命を準備していきます」(J242P)。「金融寡頭支配の国家的統合による所有・経営・管理の独占は、逆に、労働者階級の矛盾を、国家支配と全人民の社会矛盾として普遍化せました」(J243P)。「この不可避の帝国主義の矛盾は、労働者階級・人民へと転化させる為に、人民の生活の不確かさは増大し、改良的闘いは、革命の波を準備します」(J243P)。

ここで日本赤軍が言わんとしていることは必ずしも明解ではないが、要するに、帝国主義の主要矛盾は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの矛盾ではなくて、国家支配と全人民との矛盾(?)であり、帝国主義は全人民を不確かな(?)生活に叩き込むが故に、改良闘争それ自体が、帝国主義の限界(?)をつきやぶり、革命を準備していくということを主張しているようである。

ここに現われている日本赤軍の帝国主義把握・帝国主義分析の根本的欠陥・誤りの第一は、帝国主義概念を独占資本段階の資本主義にワイ小化するというレーニン『帝国主義論』を踏襲している点。第二は、帝国内国人総体と被植民地人民総体とのA搾取―被搾取V/A収奪―被収奪V/A支配―被支配V関係こそ、世界帝国主義の主要矛盾であるという把握を欠落させている点である。それ故、世界帝国主義の独占資本段階が、帝国内国にもたらす、国内支配統治

の実態を全く捉え切れていないという点である。

独占資本段階においても世界帝国主義の主要矛盾は、「国家支配と国内の全人民との矛盾」なるものではなく、帝国本国人総体と被植民地人民総体との矛盾であり、それを土台とした帝国本国内の支配統治様式の特徴は、植民地主義収奪がもたらす超過利潤をもって、帝国本国人総体を帝国主義的寄生虫として再生産し〔註1〕つつ、その中からさらに中産階級・貴族的（上層有産）プロレタリアート・御用組合・小ブル的政治潮流を大量に生み出し、この層を国内支配統治の基本的な社会的支柱とすると同時に、疑似「社会主義」的な社会福祉政策をもって下層貧困層をも体制内にくくりつける点にある。

したがって、植民地主義収奪の分配に与えることで総体が帝国主義的寄生虫と化している日本人民の改良闘争それ自体は、主観的にはどうであれ、客観的には植民地主義収奪の再分配という枠組を越えることはできず、それが自己目的化される時、革命を準備するどころか、日帝に対して、分け前をもっと寄せせよという圧力として、新植民地主義侵略を後押しする方向で体制内化されてしまうが故に、逆に反革命陣営を強化するという結果をもたらしてしまうのである。（註2）

この意味において、日本赤軍の主張は、誤まった帝国主義分析に基づく改良主義である。ここでの日本赤軍の帝国

主義分析は、世界帝国主義の具体的実態の科学的論理的分析ではなく、一國革命主義をア priori な前提として、それを成り立たせるために、あるいは、日本人民共和国の主体たる日本人民の幅広主義的な団結を正当化するために、現状分析をねじまげたものと言えよう。

「日本人民」という言葉の連発、「団結」という言葉の連発、あるいは共産主義社会を「仕合わせな社会」と表現する P H P の発想は、反ファッショ人民戦線的に幅広主義的な団結を自己目的化し、帝国主義的寄生虫と化している日本人民の市民主義に迎合する戦術の現われである。この意味で、日本赤軍の連発する団結は、日本共産党の「団結」、左翼連合の「団結」と同質的なものと言えよう。

〔註1〕もし、日帝の新植民地主義収奪網が完全に破壊されたとするならば、食料についてだけでも、現在一人当たり一日平均二、二〇〇カロリーぐらい摂取している日帝本国人が、一、七〇〇カロリー程度しかとれなくなるという試算があるが実際はこれ以下になる。

〔註2〕不況から日帝本国人労働者の生活を守るために侵略戦争を待望する労働組合の潮流が日帝本国内においてすでに台頭してきている。